

嘉興と湖州との佛蹟

——靈峰より雲棲まで(下)——

稻葉圓成

靈峰と清朝天台

梅溪といふは川沿ひの僻陬の一小都會であるが、こゝから安吉縣までは三十五清里、安吉から四十清里南に孝豐縣がある。安吉は寔れて居る小さい街ではあるが、縣衙門があつたので、城壁を以て廻らして都城の型だけは具へ居る。街の中で目に立つ建物は耶蘇敎の教會堂で、尖塔の十字架がこの小さい街に高く聳えて居る。此處の飯店で中食を整へる。孝豐縣までの四十里は日野の中を縫ふて行く平凡の田舎路で、何等の見るべきものはない。轎夫が指して此邊で一ヶ月前に土匪が出て旅人が慘殺されたといふは一寸した阪路中途であるが、その阪を降一切つた處には、若い男が瀕水に小舟を浮べ五六羽の鶉を逐つて魚を漁つて居る。頗る平和なものである。それを暫く行くに道士が寺男

をつれて奉加の米を集めて居るのに出會ふ。今は舊曆の臘日なので年越の用意の奉加であらう。日本の坊さんが米初穂を集めに行くに全く同じ習俗であるのに興を催す。たゞ針金が兩方の岸に引張つて、それに小舟が一艘繋いであるばかりで船頭は居らぬ。それが渡船である。旅人は勝手に針金を手繰つて舟をやるのである。いかにも呑氣な支那らしい渡船である。孝豐縣より五清里手前に勅建五峰寺といふかなりの大刹がある。日没にはまだ少し間があるので、轎をすて、寺に入つて見る。堂宇はすべて周備して居る。天王殿 大雄殿 觀音殿 それに祖師堂 禪堂 もあり、加之、小さな玩具のやうな塑像ではあるが五百羅漢のある羅漢堂まである。しかし住僧は僅かに五六輩で、寔しい空刹である。寺内に三四碑がある。讀んで見るに康熙の碑も光緒の碑との間に寺歴に就いて志す所に左右がある。康熙碑の

方には唐昭宗の時の創建で相徳寺と呼ばれたが、吳越錢鏐王の時に龍興禪院の額を賜り、宋眞宗の祥符年間に徳山教院と名を改めたことがある。光緒碑の方では唐龍紀二年に龍興寺、天祐四年吳越王の時に五峰興國寺、宋大中祥符の年に徳山教院、明洪武に至りて五峰禪寺と呼ばるやうになつたことがあつて一致せぬ。寺傳のアテにならぬ一例である。五峰といふのは寺の後に五峰の山があるから名を得たものである。そしてこの寺の名は「浙江通志」には見えぬ。午後五時といふに孝豊縣に着、群賢社といふ名だけは嚴めしい旅館に入る。孝豊縣は小さい山間の一都會であるが、雪を頂いて居る安徽の連山と天日の巨峰とが、南から東へかけて遠く聳え立て居り、近い山々がその前に重疊し蟠居して居る。そして水の清い苦溪が、その街の東から北へミ流れて街の両面を取り巻いて居る。いかにも山間の都市としての面目を備へて居る。それに電燈も點いてある。

明くれば一月三十一日である。昨日の轎によつて今日はいよく靈峰に詣づるのである。少し雲はあるが大丈夫な日和である。靈峰は孝豊縣の東北十五清里の地にある。縣城を出て苦溪に架けてある細い長い橋を渡り、山巔に小さい塔が突つ立て居る山を右に望んで山の裾を縫ふて行けばやがて靈峰に達する。寺は峰の

腰にある。常盤木で茂つた森を突きつける、靈峰講寺の額のある山門に出る。なか／＼に大きい整つた寺で、且つ閑寂な氣持のよい處にある。門を入れば例の如く天王殿があり大雄殿がある。その後の殿宇は今新築中である。大雄殿の本尊は釋迦一尊と二夾侍で、その後方に文殊普賢が安置してあり、その兩廡には十八羅漢がある。一僧が出て來て親切に大雄殿の右の客室に案内してお茶をくれる。大雄殿の前には順治己亥仲秋癸丑弟子靈巖立石の靈峰藕益大師傳碑がある。これは靈峰宗論に出て居る傳記と全く同じである。その隣には光緒二十四年立石の重建靈峰寺社がある。これによるこの寺は後梁開平年間の創建で、宋治平年中に百福講寺の名を賜つたが、達輪大師性徹が重修した時にはまだ古碑碣も多く存して居たが、成豐十年粵匪が孝豊縣を陥れ、同法甲子には賊は平いたが、この亂の爲めに寺宇は悉く燬かれて了つた。その後僧諦隱大亮受巧成就廣慧等が同治の末年より此處へ來て、力を努めて再建重修の事に衝り、漸く今の殿宇が出來、舊態を保持するやうになつたといふのである。これで現在の建物が、長髮賊の亂後に出來た新しい建築であることが知れる。祖師堂には當寺堂上の和尚の靈牌が祀つてあるが、其の中に次の一牌がある。

本山傳 天台 第四十世了開悟之神位
臨濟 正宗 四十六世了開祖

この了開といふのが前の光緒碑に見ゆる諦隱重建の後
に此寺に居つた監院了開であり。又後にいふ法脉碑記
に見ゆるそれであることは勿論である。此の碑の示す
所では了開は天台と臨濟との兩宗の衣鉢を承けて居た
といふことがわかるが、この他の澤山にある靈牌はす
べて傳臨濟正宗云々あるものばかりで。天台正宗を
傳承した和尚は見當らぬのである。これに依れば、同
治重建以後には此の寺が臨濟宗の人々によつて住持せ
られた天台宗の影はなくなつて了つたのである。ここ
ろが歩を傳じて新築中の後殿の右手にある一堂には天
台源流の宗脉圖が掛けてあり、その前の壁間には、右
に藕益の詩文を左には靈峰法脉碑記が刻してある。こ
れによると咸豐以前までは智旭以後ズット天臺正宗を
傳へた和尚によつて住持されて居る。こゝがわかり、天
台山ですら國清寺始め諸寺が早く臨濟の道場となつて
了つて居た明末より清朝へかけて、此の寺だけでは天
台宗の傳統が相續されてあるばかりでなく、上海の龍
華寺や奉化の岳林寺での所見も併せ見れば、この靈峰
で天台正宗を傳へた和尚が所在に散在して、細々なが
らも支那天台宗を清朝三百年に相續せしめた本源が、

此の靈峰にあつたここか知られるのである。いはゞ靈
峰は明末から清朝末期までの間に於ける天台宗の總本
山(日本流の考方に譯していへば)となつて居つたので
ある。天台源流の宗脉圖に掲げる祖師は左の如し。

傳天台正宗靈峰第一世藕益旭祖大師

同 第二世蒼輝晟大師

同 第三世警修銘大師

同 第四世履源宏大師

同 第五世素蓮珠大師

同 第六世慧覺成大師

同 第七世達輪徹大師

そしてその宗脉圖の上方の部に左の識語がある。

光緒四年菊月上浣吉旦

靈峰講寺後裔諦隱敬立

さればこの圖は清末に此寺中興の祖諦隱の作るもの
である。そして圖の下方には天台源流とある。そして
壁間にある「靈峰法脈碑記」は光緒二十五年三月、本
山住持顯本と監院了開とが立てたものである。これは
諦隱示寂後に前の宗脈圖を解説する爲に作られたもの
で、中に諦隱の略傳を叙べてある。これによると諦隱
は温州の人で、始め天台國清寺で具足戒を受け、後
友の大亮等と此の靈峰に來り祖庭の荒廢を慨いて重建

の事に衝り略ぼ舊觀に復したばかりでなく、其高足五十有餘人は師の志を輔けて、土木に法脈の弘宏に盡した。かくて光緒十九年に諦隱は入寂したが、其弟子の顯本が其法脈を相承して天台の正宗を傳統し、了開は顯本より傳承して之を達階に傳へたといふのである。して見れば、宗脈圖所掲の後に諦隱し顯本し了開し達階の四祖があつて天台宗を傳へた事が知れる。これらはずべて光緒の者で新しい記録ではあるが、從來清朝の天台宗の流傳は全く不明であつたのであるから、これだけの流傳を確め得たのは誠に思はぬ拾物であつた。

この寺の門を出て大きい並木の道を一丁程下る右側に塔院と書いてある小門がある。その中に藕益の墓がある。松の木の下に石を圍んだ中に卵塔がある。それには傳天臺靈峰第一世藕益大師舍利塔と刻みつけてある。又この塔の後方に同じやうな型の卵塔一基が鬱蒼たる森に包まれてある。それには永福開山靜主西池涵禪師之塔とある。これは前出の顯本の法脈碑記にある。後梁關平に此寺を創建した義隣禪師のこゝかとも思はるゝが、案内してくれた寺僧に質ねても要領を得ない。住持は何處へ行つたかと聞いたら奉化縣へ旅行して居るといふことだ。奉化縣は布袋和尚の居つた岳林寺のある處で、この寺では傳天台正宗云々の位牌

を祖師堂に祀つて居るのである。それはさて、明末の佛教を代表する智旭の終焉の地に來り、親くその墓に展する自分を思ひ返して、何かは知らず嚴肅な心持になつて念佛の中にその墓を弔つたのである。この寺には八十名餘りの僧が常住して居るといふことだが、聞けば今では別に講經があるでもなく、又つきつめて坐禪をするでもない、悠々眠つたやうな生活をこの閑寂の寺に貧りつゝあるのだ、しかしこゝでは住僧が接客のこゝもやれば炊事から給仕の勝手仕事までやるのださうである。靈峰はいかにも遠く俗寰を離れ、而も村へも町へも近いし、南面であるから日受もよく、いづれにしても、阿蘭君には相應しい場處である。藕益が晩年此に駐錫して心置なき讀書三昧に入つて居つたのであるが、誠に地の利を占めたものといふべきである。

此地から天目山に出る通路があるが、難道峻岨で通常の轎は通ぜぬので山轎で行くことである。私は曩に天目に詣つたのであるし、それに時正に舊臘で山賊が跳梁するといふので、難を捨て、易に就き、往路と同じ路を湖舟に歸ることにした。宿泊も孝豐縣と梅溪から出る夜舟と途中二泊して三日目の朝湖舟に着いた。歸路は別に珍らしいこともないが、孝豐縣の宿へ

夜遅く縣衙門の官吏がやつて来て、護照を檢べた後、明日は護衛兵を召し立てるから、何時に出發するかを問ふたが、護兵は有り難迷惑でもあり、何等危険のありさうにはない行路でもあるから、厚意を謝して謝絶しやうとしても、何さいふても承知をしない。それでは今朝早く護兵のまだ來ぬ先に發たうとしても、まだ薄暗い中から二名の兵隊がやつて來たのでそれも失敗に終つて了つた。こちらは轎であるし、護兵は執銃の徒歩であるから、それに氣兼ねして轎夫は歩が遅いし、それに中飯も喰はせ酒錢もハヅマねばならず、さればさていよく危機が迫るやうな場合には無論役には立たぬので、太底の場合は護兵などはない方がよいのである。安士縣で護兵が交代をして梅溪までさうく送り届けてくれた。安吉縣では警察署長が名刺を持たせて、公務でお目にかゝれぬからさういつて寄越す。なんでも孝豐縣から前に知らせをして置いたものさ見える官衙の人々が田舎へ來るさ、外國人に對するここか今でも甚だ慇懃である。都に近い處では知つても知らぬ振をして居るから、結局旅行者には氣樂である。梅溪の船頭は私共の歸りが遅いので心配して町外れまで迎ひに來てくれて居る。その心盡しが異境の旅人には殊に嬉しかつた。夜舟は相變らず寒かつたが、それでも

疲勞して居るのでよく眠つて、管が破れた時ははや湖舟に近い飛英塔の見ゆる處であつた。

湖舟では前に見残した天聖寺を見、湖舟名産の筆こ眞綿を買つて午後一時に出帆する抗舟行の輪船に乗る天氣は日本晴れの小春日和である。船は南へ南へさここまでも桑園の間を縫ふて駐る。十六夜の月が靜かな運河の小波を明く照してから、暫くして洪宸橋畔に到着したこゝは杭舟城外で日本の租界の有る所である。それから俤にて城内の停車場に近い新迎賓旅館に投ず時に二月二日の夜九時五十分)

雲 棲 詣 で

二月三日。今日も亦朝より小春日である。今日は轎を賃して雲樓に詣つる日である。途次六和塔を見る。六年前に遊んだ時は荒れ果て、居た塔院の大仁寺が見違へるやうに修繕が出来て居る。塔の第一重の正面には釋迦尊が安置してあるが、第二重以上には道敎の神像が祀つてある、第一重には宋の勅封の印授を刻した碑や、もの由來を記した碑が箝めてあり、又金剛經の刻石もある。塔の後方小高い處には大きい乾隆帝の御碑がある。これによるさ今の塔は雍正帝の發起で、その内帑を捨して重建され雍正十三年に着手して二年を經

て竣工した。そしてその造塔の目的をいふに有驚浪之虞復の則有安爛之處云々ある。これ造塔の由來を盡す語であるが、錢塘江の鎮護としてこの塔が建てられて居るのである。一體全體支那の造塔の由來に二種の別があり。一は佛教信仰の發露であるが、他は風水家の迷信から來るものである。即ち後者の場合に於いては都市、山川等の安泰を得る爲の鎮護の爲に造塔が企てられるのである。即ち風水家の占ふ所によつて土地の弱點させらるゝ處に塔を立てゝそれを補ふさか、邪神惡鬼亡靈の祟を排除する爲に造塔するといふのはその一例であるか。支那の旅行者が常に目撃するやうに塔のみが山嶺に獨立して突立つて居るのは、多くの場合は土地の鎮護である。今の六和塔の如きは浙江の水路の安全を保護する爲に設けられた邪神惡鬼を攘ふ爲に建てられて居るのである。錢塘江は錢塘觀潮といつて古來から喧しく言はれて、海からの上げ潮の爲に航海の危険が多いのであるから、かういふ危険を除く爲に惡魔除けの塔の起立を要するのである。この塔の歴史を讀むと永明の智覺や後には雲栖の株宏が造塔に關係して居るのであるから、佛教關係が全然ない譯ではないが、造塔の根本意思は前述のやうに佛教的信仰とは無關係である。尤も塔そのものが佛教のものであるから、造塔の意思の如何によらず、塔の中には佛像も安置し、これに奉化する爲に塔院が附屬建物として建てられる場合が多いのである。それはさて、こゝを出るにすぐ錢塘江の磯である。この磯傳ひに行くに十清里ばかりで左に折れ亦進むに三七八清里、漸く雲栖寺の第一關積眞亭に達する。それより右に折れ更に奥深い竹徑を進むに約二三里にして漸く雲栖寺である。その路畔に放生處がある。牛豚や鷄鴨が養つてある又その竹藪の青竹に放生竹を記して施主の名が麗々しく書いてある。竹の壽命を保證するのである人の情が禽獸のみに止まらずして草木にまで及ぶのはいかにも心ゆかしきこゝで、雲棲の遺徳が光つて居るのである。昔しから支那では放生といふことを非常に喧しく言ふやうであるか、私は支那を旅行して、それが尙今日でも可なり眞摯に實施されて居るのを見聞した。そしてかく放生が喧しく言はれる理由の一として私は支那人の殘忍性を數ふるに躊躇せぬ。實際支那人は豚や鷄を殺すにも殘忍な方法を取る。一例を言ふならば鷄の頸に穴をあけて、バタ／＼する奴から生血を絞るのである。その生血を好んで藥喰ひする。それも大道の店先で平氣にやつて居る。あんな殘酷な事は到底日本の内地では見られない國である。禽獸の殺戮を殘酷に

やる支那人の賊は、人間の殺戮を平氣で且つ殘酷にやるのである。かういふやうな殘忍な行爲を見せ付けられる支那に、反動的にそれらの虐げられるものに同情する心が熾烈に發るのは當然である。放生が喧しく實行されるのもこの感情に外ならぬ。そして現在の支那人の可なり多數の人々が、菜食を實行して肉食をせぬ戒を嚴肅に持つて居るのも、同じ理由に基くものと思はるゝ、

雲栖寺の堂宇は大した宏壯なものではない。そこにも株宏が敢て大殿を造らずといつた用意が今尙ほ遺つて居るのである。それで外で見るとやうな山門も天王殿もない。門を入るにすぐ大雄殿である。その後方に禪堂があつて、三四十の繩座が行儀よく置いてあり、堂内にはたゞ彌陀尊の座像が一軀安置してあるばかりであつて、外に何者もない。像は銅鑄に金箔を置いたものであるが、横平な御面相でたしかに明代を製作にかゝるものであらう。いかにも尊い感じを與へる佛像で、此寺この堂に相應して御本尊である。蓮池大師が或はこの佛像の前に端坐正念して持念を恣にしたのでもあらうなぞ、雲棲の昔を偲ばせるには充分である。この寺で尤も感じの好いものはこの禪堂に次に叙べる蓮池の墓所である。禪堂の後には法堂を報本堂と祖師堂との

三寶が并んで居る。法堂は物置になつて居り、報本堂はこの寺を護持する信徒の住持である。祖師堂には蓮池大師を祀つてあるが、その像は新しい金箔で光る劣悪なもので、却つてなくなかなかな思はしむる。その像を安置するお厨子も金色燦爛とはして居るか俗臭紛々たるものである。されき堂内常に香煙を斷たず、詣者踵を接し、流石に蓮池大師の遺徳の根強いものである事を語るものであり、又支那の民衆がいかにも多く淨土の念佛によつて恵まれて居るかを語る反影でもある。蓮池大師の像の左右には本寺近世の中興である鳳翔と瑞眞との二像を案じ、外に蓮池の畫像（水彩畫。極めて最近のもので辛酉秋八月廿六世孫源智あり）を一龕に安じてある。この堂前の壁には鳳翔瑞眞及び宏憲の像を刻し、その左には董其昌の金剛經が彫り付けてある。大雄殿前の兩廡の壁には明萬曆から光緒道光に至る多くの重建記の碑がある。これらによれば今の伽藍はすべて長髮賊後の重建にかゝるもので、瑞眞―中庸―宏喜―補雲（鳳翔）の歷住によつて募化經營せられ、且つ寺田を買均して永興の計をもなされたものたる事が知れる。現に百五十名の僧が常住して居るこの寺である。門を出ると御書亭があるが、その前に蓮池塔院と誌した石の葉があり、それには董其昌が書

いたこ云署名までしてある。そこから左に入るこすぐ塔院である。塔院は九尺四面ばかりの小菴であるが、此小菴は老松老杉の常磐木の森によつて蔽はれた幽邃な靈境に建てられて居る。いかにも脱俗超世の求道者の永へに住するに相應しい淨域である。菴には西方救王の額があり、前立には蓮池の木像があり、其後に卵塔がある。尤も鏡餅を二つ重ねた如き型で常の卵塔ではない、此に大師の舍利を藏するのである。口を漱ぎ手を淨めて默禮少時、古聖の在りし昔し風貌を恁に偲んだのである。菴の前には十畝許の空地があるが、その右に吳應撰の蓮宗八祖杭世古雲棲寺中興尊宿蓮池大師塏銘并序の刻石がある。頗る大石で大明崇禎四年二月の年次がある。古色蒼然この靈境にふさはしい碑である。折柄寺の方から誦經念佛の聲が森を越えて聞えて来る。

今の雲栖寺には蓮池大師を偲ぶ寶物は一つもないこいつてもよい。住僧に請ふて零片斷簡でもよいから大師の筆蹟を見んこしても、これすらも無いこいふ。それ程に大師の跡は薄くなつて居るから、單に史料採集の目的でこの寺に遊ぶ者は必ずや失望するであらうしかし大師の生命は大師が好愛したこの山の影この木の色々にも生き昔しながらの古雲棲が今尙ほなして居る

雲栖に遊ぶものは必ずやこの常住のものによつて満されるであらう。

雲栖の歸路湖上に登つて烟霞洞の石佛を見、南屏山麓の永明智覺の塔院にも詣して、杭世城内の宿へ歸つたのは夜も可なり更けて居た。(終)

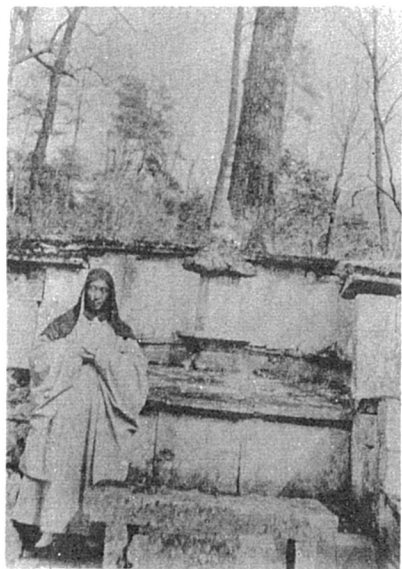


寺峰靈縣豐孝



院塔師大池蓮

〔此寫眞は稻葉圓成氏の撮影せられしものにして本誌所載
「嘉興と湖州との佛蹟」の記事参照せらるべし〕



塔卵師大益藕前寺峰靈